

2018年12月4日（火）

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 川上弘美さんWS 平安時代の女性の生き方に迫る

1, 平成30年度2回目のワークショップ

昨年度からAIRとしてないじえる芸術共創ラボに参加して下さっている川上弘美さんとのワークショップを行いました。

現在『婦人公論』で川上さんが連載中の小説「三度目の恋」は、『伊勢物語』をモチーフにした作品です¹。「三度目の恋」は主人公の梨子が、夢の中で過去と現代とを往還するという構造になっており、21話から始まった「昔昔の章」（2018年11月27日号）は、平安時代を舞台に物語が展開します。

川上さんからは、特に平安時代の生活や文化の細々したことを知りたいというご希望が寄せられ、平安時代の文学を専門としておられる青木賜鶴子先生（大阪府立大学教授）、岡田貴憲先生（当館特任助教）、和歌文学を研究しておられる小山順子先生（京都女子大学教授）と一緒にワークショップを続けています。

今回は、連載を担当しておられる編集者の方も一緒にご参加くださり、現在川上さんが執筆しておられる最新話や今後の展開にまで話が及びました。

¹ 『婦人公論』（中央公論新社、2018年1月23日号～）

² 画像の引用は、東京国立博物館デジタルコンテンツに拠る



2, 平安時代の出産について

21話では、現代の梨子が男の子を出産します。現代での出産の描写は、川上さんご自身の体験などをもとにされているとのこと、大変な臨場感がありました。

川上さんは、平安時代の出産についても書こうと考えておられるのですが、なかなか具体的なことが分かる資料に行き当たらないそうです。

青木先生は、図録やネットに掲載されている絵巻を示してくださいました。そのうち、東京国立博物館所蔵 住吉如慶筆『伊勢物語絵巻』79段【図1】²に描かれた貴族の出産場面は、出産中の女性、世

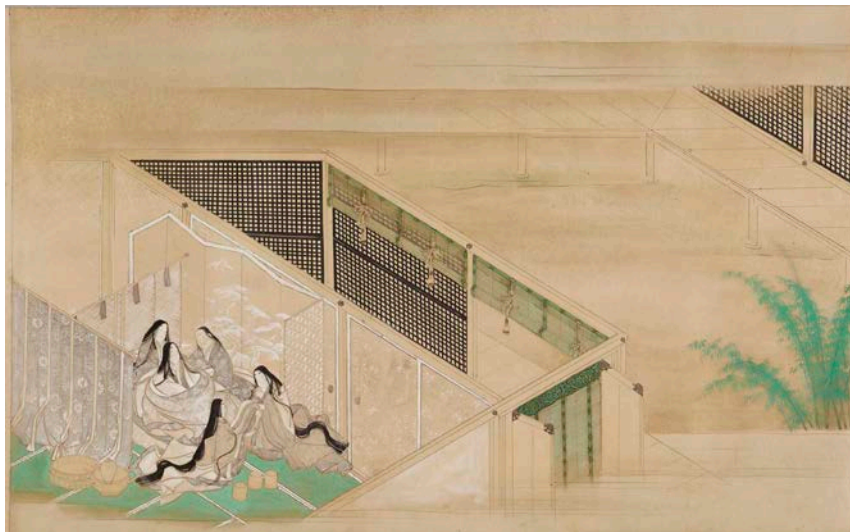
(<https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/E0048517>)。

2018年12月4日(火)

話をしている女性達は皆真っ白な調度に囲まれ、真っ白な衣装を着ています。今のように専門職の助産師はおらず、出産に際しては医学的というよりも呪術的なサポートが多くを占めており、白を使うのには魔除けの意味合いがあったのではないかとのことです。

このように図を観察することで、小説での具体的な描写が可能になるという川上さんに、小山先生は、宮中の様子がよくわかるという京都文化博物館「華開く皇室文化－明治宮廷を彩る技と美」(http://www.bunpaku.or.jp/exhi_special_post/hanahirakukoushitsubunkaten/) に、出産の際の調度品が展示されていたことを紹介しておられました。

【図1】



3, 平安時代の結婚生活

現代と違い、平安貴族の結婚生活は、親元で暮らす女性の家へ夫が通う〈通い婚〉でした。

川上さんからは、男性が独立することはないのですか、他の女性のところへ通う時にはどうするのですか、というご質問が。

先生方によると、正妻の家を足がかりとするのが常とのことですが、当然気になるのは、他の女性のところへ通う夫に対する正妻の心理ですが、古典作品の中には気持ちよく送り出すパターンや嫉妬するパターンが描かれており、やはり当時であっても大きな問題のひとつであったようです。

通い婚、という知識はあったものの、実際の生活を事細かに想像してみると不思議な点がいくつもあります。

たとえば貴族の出勤時刻はとても早いのですが、他の女性のもとに宿った翌朝には直接朝廷へ向かうのでしょうか。それとも、一度正妻の家へ帰るのでしょうか。

先生方は、貴族はいくつもの荘園を持っている場合があるそうで、状況によって使い分けているのではないかとおっしゃっていました。在原業平は長岡と京とに家を持っており、京の家は通勤用であったのではないかとのことです。

また、どのような行程を経た人が正妻となるのかというご質問に

2018年12月4日（火）

は、親が決めた人が正妻となる、というお答えでした。夫婦関係の持続については法律（令）^{りよう}で定められていることがあり、たとえば男が三年間³通ってこなければ離婚となるそうです。

このことを聞いて、『伊勢物語』24段のことが思い出されました。24段は、音沙汰のない夫を待ちわびた女が、三年経った後別の男と結婚しようとした時に元の夫が帰ってきたことを苦しみ、死んでしまうという話ですが、女がさまざまな状況の板挟みになった状況が改めて理解されます。



³ 子がある場合は五年間。

⁴ 日向一雅「女性貴族の一日」（有精堂編集部編『平安貴族の生活』

また川上さんは、何もない日の既婚女性の生活の様子にも関心を向けられました。

これは案外難しいご質問です。というのも、日記は男性貴族の公的な記録に終始することがほとんどですし、何かイベントや事件がなければ物語などにも書かれることはないため、女性の平凡な一日の詳細は、記録や文学から滑り落ちてしまうのです。

岡田先生は先行研究⁴をひきながら、既婚女性の一日のスケジュールについて、明け方にお粥などの軽食をとり、夫が午前中の出仕から帰ってきた10時頃に一度目の食事を、16時頃に二度目の食事をとり、日暮れには就寝していたと思われる、と説明してくださいました。朝型の生活なのですね。

また、『蜻蛉日記』や『落窪物語』などを例にしながら、女性の重要な仕事として裁縫や染色をあげてくださいました。男性の衣装を用意するのは、妻の家の仕事だったそうです。

このようにひとつひとつを想像してゆくと、遠く感じていた平安貴族たちが、急に生々しい存在のように感じられます。

有精堂出版、1985年)

2018年12月4日(火)

4, 女房の活躍

さて、「三度目の恋」の平安篇では、業平の恋の相手は梨子ではない人になるそうです。業平については横で見ている人の視点からの方が書きやすいのではないかと考えておられる川上さん。梨子を姫君の女房(高貴な人に仕える女性)という設定にしようと考え、女房の生活や恋愛について、先生方に詳しく質問なさいました。

青木先生によると、女房は基本的には主人の家に住み込みで働いているようで、子どもがいる場合には、乳母に預けて主人にお仕えしているのだそうです。

また、複数の主人に仕える女房もいたそうです。青木先生は、『源氏物語』で光源氏に末摘花を紹介した女房(大輔の命婦)を例にとりながら、「光源氏の乳母子(左衛門の乳母の子)で、御所に仕えています。光源氏も時々召し使っている、とあります。また末摘花の屋敷にも自分の部屋を持っている様子です。」と説明して下さいました。

興味深いのは、こういった様々な場所に出入りする女房たちが、男性に新しい女君を紹介したり、主人の夫(あるいは妻)の浮気相手の情報を流したりしたことが想定される、というお話でした。

また、女主人の恋人(あるいは夫)と通じる女房もいたのではないかと、というお話も刺激的です。主人と恋人の仲を円滑に取り持つために、という割り切った関係もあれば、自らの野心のためにそのよ

うな関係になる女房もいたのではないかと、とのことでした。

後日小山先生はこの件について、以下のように補足して下さいました。

物語などでは脇役の女房ですが、彼女たちの自意識や葛藤をうかがわせる資料として、『無名草子』があります。これは1200年くらいに女性の手によって書かれた評論です。この中に、女房が「後世に自分の名が残るような作品を残したい」と述べている箇所があります。

普通の貴族の家に出仕する女房と、内裏に出仕する女房では、プライドの高さも違うと思うのですが、自分自身の文才・歌才で世に残りたい、という強い自意識が表れています。

また別の個所では、音曲はその時、生きている時の間しか伝わらないけれど、文学であれば後世に残る、とも書いてあります。

みんながみんなそうだったとも思いませんが、自身の名をとどめたいと考える女房もいた、才能があればこそその願望も熱烈だったのだろうか、と色々と考えさせられます。

こういったエピソードを聞いた川上さんは、女性がいきいきと活躍している様子がわかって楽しい、と、女房の在り方について強い関心を持たれた様子でした。特に、さまざまな主人に仕える女房

2018年12月4日（火）

の働き方は面白いので是非小説に取り入れたい、とのこと。

女房という仕事の具体をお聞きになり、女房として生き、出世してゆくには、頭の良さを活かし、主人の信頼を勝ち得ることが大切なのですね、と感慨深そうに述べておられました。

このワークショップのなかで、女房が、主人と業平の恋を垣間見るのはどうかというアイデアもお話くださり、江戸時代篇とは異なった視点から業平が描かれるだろう今後の展開が、ますます楽しみにになりました。